

第4章 若者の意識とソーシャルネットワーク—北海道の特徴—

この章の目的は、北海道の厳しい雇用の現状の中で若者が、どのような生活意識をもち、日々を暮らしているのかを分析から明らかにすることである。

大きく二つの事柄についてふれたい。

ひとつは「悩み」を焦点としたものである。仕事に関わることに中心をおきながら、「現在」と「将来」についてどのように考えているのか、そしてこれらの悩みを相談する「ソーシャル(社会的な)ネットワーク」はどうなっているのか、特に仕事の場を軸にした「ネットワーク」がもつ意味は、北海道の場合どうなっているのかを考察する。

もうひとつは、もっと広い生活意識を分析の対象とする。ここでは、「将来の見通し」、「努力への信頼」、「仕事以外の生きがいの有無」、「人間関係戦略」、「自己への確信」等のテーマが扱われる。

1. 悩みの構造とその背景

ここで分析の対象とする悩みとは、仕事に関わる「今の仕事や働き方の悩み」と「将来の生き方や働き方の悩み」、そしてそれに部分的に付随する「人間関係の悩み」と「お金の悩み」である。まず、単純集計の結果を図表4-1～4にあげる。

図表4-1 今の仕事や働き方の悩み

	度数	パーセント
悩みあり	489	68.6
悩みなし	220	30.9
無回答	4	0.6
合計	713	100.0

図表4-2 将来の生き方や働き方の悩み

	度数	パーセント
悩みあり	533	74.8
悩みなし	176	24.7
無回答	4	0.6
合計	713	100.0

図表4-3 人間関係の悩み

	度数	パーセント
悩みあり	428	60.0
悩みなし	283	39.7
無回答	2	0.3
合計	713	100.0

図表4-4 お金の悩み

	度数	パーセント
悩みあり	476	66.8
悩みなし	233	32.7
無回答	4	0.6
合計	713	100.0

全体的に生活困難の深刻さを表しているのか、「悩みあり」は多い。特に「将来の悩み」は、およそ四分之三の者が「悩みあり」としている。しかし現在の生活困難が問題であるのなら、「今の仕事や働き方の悩み」の方が多くても良いはずである。ところがそうではなく、「将来への不安」が彼ら／彼女らにとって大きなものであるということに注意しておく必要がある。言い換えるなら、具体的な悩みというよりも、将来的な悩みへの不安に注目することが重要

なのではないか。

そして次に多いのが、「今の仕事や働き方の悩み」で、以下「お金の悩み」、「人間関係の悩み」と続く。どれも6割を超えている。

ところでこのような悩みは、現在の就業と関わりがあるのだろうか。当然ある、と言えそうだが、クロス表を作成してみると、意外なことに「現在の仕事や働き方の悩み」との関係が確認されるのみで、「将来の生き方や働き方」等とは関係がない。もっと複合的な背景がある。

この現在の就業との関係があった「現在の仕事や働き方の悩み」について図表を掲げて確認しておく。それが図表4-5になる。

図表4-5 現在の就業形態×「現在の仕事や働き方の悩み」

		「現在の仕事や働き方の悩み」			合計	
		悩みあり	悩みなし	無回答		
現在の就業状況	正社員 (公務含む)	度数	249	108	2	359
		構成比(%)	69.4	30.1	0.6	100.0
		調整済み残差	0.48	-0.47	-0.02	
	パート・ アルバイト	度数	125	75	2	202
		構成比(%)	61.9	37.1	1.0	100.0
		調整済み残差	-2.41	2.26	0.96	
	契約・派遣等	度数	70	10	0	80
		構成比(%)	87.5	12.5	0.0	100.0
		調整済み残差	3.88	-3.78	-0.71	
	自営・家 業	度数	23	19	0	42
		構成比(%)	54.8	45.2	0.0	100.0
		調整済み残差	-1.98	2.07	-0.50	
	失業	度数	17	6	0	23
		構成比(%)	73.9	26.1	0.0	100.0
		調整済み残差	0.56	-0.51	-0.37	
	無職で 何もして いない	度数	3	2	0	5
		構成比(%)	60.0	40.0	0.0	100.0
		調整済み残差	-0.41	0.44	-0.17	
	その他・ 無回答	度数	1	0	0	1
		構成比(%)	100.0	0.0	0.0	100.0
		調整済み残差	0.68	-0.67	-0.08	
	合計	度数	488	220	4	712
		構成比(%)	68.5	30.9	0.6	100.0

($\chi^2=23.29$, $df=12$, $p<0.025$)

図表4-5について説明をする。全体的な悩みの多さは図表4-1で確認した通りである。就業状況別にみてみよう。最も構成比の高い正社員でも悩みはある。しかし平均的な数字となる。そしてその他の就業状況では、特に「契約・派遣等」で多くなっている(87.5%)。意外なことに「パート・アルバイト」は少ない(とはいっても61.9%もあるが)。これは「パート・アルバイト」就業者の構成(家族との関わり)との関係が示唆されよう¹。

それではこのような悩みは、どのように相談されているのだろうか。ここでは相談を行な

っている関係を、「ソーシャルネットワーク」ととらえ、分析を行う。

まず、具体的な分析の手順にふれよう。先の「悩み」の有無の設問で、「悩みあり」と答えた者の相談を相談相手毎に単純集計した。調査票で用意した相談相手は、「親・保護者」、「兄弟姉妹」、「学校で知り合った友人」、「学校外で知り合った友人」、「学校の先生・職員・相談員」、「職場の上司・先輩・同僚」、「恋人・配偶者」、「公的な支援機関や労働組合・専門家等」、「モバ友・マイミクなどのネット上の友人」、「その他」の10の選択肢、そして「誰にも相談していない」である。これへの答えを、まとめたのが**図表4-6**となる。

図表4-6 抱えている悩みと相談相手(M.A.)

	「現在の仕事や働き方の悩み」		「将来の生き方や働き方の悩み」		「人間関係の悩み」		「お金の悩み」		「悩み」の単純集計	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
親・保護者	145	29.7%	166	31.1%	106	24.8%	211	44.3%	628	32.6%
兄弟姉妹	65	13.3%	64	12.0%	59	13.8%	47	9.9%	235	12.2%
学校で知り合った友人	158	32.3%	184	34.5%	167	39.0%	77	16.2%	586	30.4%
学校外で知り合った友人	107	21.9%	124	23.3%	106	24.8%	46	9.7%	383	19.9%
学校の先生・職員・相談員	10	2.0%	5	0.9%	4	0.9%	4	0.8%	23	1.2%
職場の上司・先輩・同僚	220	45.0%	122	22.9%	123	28.7%	43	9.0%	508	26.4%
恋人・配偶者	169	34.6%	206	38.6%	142	33.2%	182	38.2%	699	36.3%
公的な支援機関や労働組合・専門家等	6	1.2%	2	0.4%	2	0.5%	1	0.2%	11	0.6%
モバ友・マイミクなどのネット上の友人	11	2.2%	11	2.1%	15	3.5%	3	0.6%	40	2.1%
その他	20	4.1%	24	4.5%	23	5.4%	14	2.9%	81	4.2%
誰にも相談しない	38	7.8%	64	12.0%	39	9.1%	84	17.6%	225	11.7%
母数(それぞれの「悩みあり」と答えたものの数)	489	100.0%	533	100.0%	428	100.0%	476	100.0%	1926	100.0%

それぞれの悩みによって相談する相手は異なっているという結果になった。

「現在の仕事や働き方の悩み」では直接仕事に関係する「職場の上司・先輩・同僚」が多い(45.0%)。「現在の仕事や働き方の悩み」の相談相手が「職場の上司・先輩・同僚」であるのは、**図表4-5**において、「現在の仕事や働き方の悩み」が現在の就業状況と関連していたことに対応する。「現在の仕事や働き方の悩み」は、現在の就業状況の悩みであり、だから「職場の上司・先輩・同僚」に相談する。次に選ばれるのは、「恋人・配偶者」(34.6%)である。少し差がある。これと「学校で知り合った友人」(32.3%)や「親・保護者」(29.7%)はそれほど差がない。

同様にみると、「将来の生き方や働き方の悩み」は、「恋人・配偶者」と相談する者が多い(38.6%)。重要な悩みであった「将来の生き方や働き方の悩み」は、「働き方」という仕事に関する要素も含んでいるが、未来を共に生きる者との相談になる。次に多いのは、「学校で知り合った友人」(34.5%)や「親・保護者」(31.1%)となる。「職場の上司・先輩・同僚」は少ない(22.9%)。

「人間関係の悩み」は「学校で知り合った友人」に相談する者が多い(39.0%)。「人間関係」

という言葉の意味するところが、私生活としてイメージされているのか、その相談相手は友人である。次に多いのは、「恋人・配偶者」である(33.2%)。次に「職場の上司・先輩・同僚」がくるのは(28.7%)、職場の人間関係が難しい場合があることを反映している。

「お金の悩み」は、対象者の年齢の問題もあるが、「親・保護者」と相談している(44.3%)。次に多いのは「恋人・配偶者」であり(38.2%)、最も身近な関係に難しい話はしているようだ。その意味で、「お金の悩み」で「職場の上司・先輩・同僚」が「学校で知り合った友人」よりも低いのは、その場の限定的な関係として結ばれていると判断できる。

これら全体を単純に合計したのが図表4-6の右欄で、「恋人・配偶者」が最も相談する相手となっている(36.3%)。「親・保護者」と「学校で知り合った友人」も30%を超えている。このように、非常に身近な(「親密な」)存在に、相談関係が収斂している点に特徴がある。

この「親密な」関係に比べると、「職場の上司・先輩・同輩」は合計において26.4%となっているが、「現在の仕事や働き方の悩み」での選択が多く、就業に限定されたものと評価できよう。

そして、影響がないという点で特徴的なものとして「学校の先生・職員・相談員」や「公的な支援機関や労働組合・専門家等」等の「公的なもの」を上げることができる。これらの「公的なもの」が非常に低い点も特徴となっている。

また「誰にも相談しない」は、「お金の悩み」については多いが、全体的にはそれほどでもなく、「親密な」関係を中心に相談しているものと思われる。

全体をまとめると、「職場の上司・先輩・同輩」への広がりもあまりなく、当然のように「公的なもの」への広がりを全く欠き、「悩み」の性格に応じた「親密な」関係を重視していることがわかる。特に、最も選択の多い悩みである「将来の生き方や働き方の悩み」を相談する「恋人・配偶者」の存在が重要である。

このような「親密な」関係を重視する姿勢には、第1章でふれた「地元志向」に通じる意識とも言える。また同時に、社会制度や公的なものに関する視野が欠落しがちで、「親密な」関係、とりわけ家族(これにはこれから作り出す家族も含めて)に閉じた解決を指向してしまいがちであることが示唆されている。

筆者は、第1章のまとめにおいて、北海道における新規学卒労働市場の検討から、「親密な」関係を育てうる公的な制度や組織との新しい関係の模索を、北海道のフロンティとして主張した。

ところで、これらの分析から、ソーシャルネットワークにおいて重視する必要がある関係がわかってきた。10のカテゴリーを、四つに整理したい。

「肉親」(「親・保護者」と「兄弟姉妹」)、「友人」(「学校で知り合った友人」、「学校外で知り合った友人」そして「モバ友・マイミクなどのネット上の友人」)、「職場」(「職場の上司・先輩・同輩」)、「そして「パートナー」(「恋人・配偶者」)である。これ以降では、この区分に従って分析を行なう。

これ以降のソーシャルネットワーク分析では、このそれぞれについての有・無を数え上げるやり方をとりたい²。

2. 生活意識の特徴と職業・キャリアの影響

この調査では生活に関する意識に関する幾つかの質問項目をもっている。まずは、単純にそれを分析し、「悩み」との関係についてふれてみよう。

(1) 生活意識の特徴

単純集計を行なったのが次の図表4-7～11である。

まず、ここにみられる生活意識について検討しよう。

図表4-7 「将来の見通しは明るい」への態度

	度数	パーセント
かなりあてはまる	51	7.2
ある程度あてはまる	265	37.2
あまりあてはまらない	274	38.4
ほとんどあてはまらない	120	16.8
無回答	3	0.4
合計	713	100.0

図表4-8 「努力しだいで将来は切り開けると思う」への態度

	度数	パーセント
かなりあてはまる	235	33.0
ある程度あてはまる	338	47.4
あまりあてはまらない	106	14.9
ほとんどあてはまらない	31	4.3
無回答	3	0.4
合計	713	100.0

図表4-7では「将来の見通しは明るい」への態度をみたものである。「あまりあてはまらない」が多い。僅差で「ある程度あてはまる」があるので、この点での評価は相半ばしている。

図表4-8では「努力しだいで将来は切り開けると思う」への態度をみたものである。「ある程度あてはまる」が最も多い。これに「かなりあてはまる」を加えると、80.4%になる。努力の価値は、多くの者にとって信頼するに足るものであることがわかる。

次に生きがいと人間関係の戦略について検討する。それが図表4-9と4-10である。

図表 4-9 「仕事以外に生きがいがある」への態度

	度数	パーセント
かなりあてはまる	270	37.9
ある程度あてはまる	289	40.5
あまりあてはまらない	108	15.1
ほとんどあてはまらない	45	6.3
無回答	1	0.1
合計	713	100.0

図表 4-10 「特定の人と深く付き合うより浅く広く付き合う方がいい」への態度

	度数	パーセント
かなりあてはまる	52	7.3
ある程度あてはまる	170	23.8
あまりあてはまらない	327	45.9
ほとんどあてはまらない	162	22.7
無回答	2	0.3
合計	713	100.0

図表 4-9 は「仕事以外に生きがいがある」への態度をみたものである。「ある程度あてはまる」が最も多い。これに「かなりあてはまる」を加えると、78.4%にもなる。仕事以外に生きがいをもっていると、多くの者が感じていることがわかる。この点に、先ほどの「親密な」関係重視という特徴が関わってくるかもしれない。

図表 4-10 は「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」への態度をみたものである。「あまりあてはまらない」が最も多く、「ほとんどあてはまらない」を合わせると 68.6%になる。「特定の人と、狭く深くつきあう方がいい」と多くの者が感じていることを表している。この点は悩みにおいても、「親密な」関係を重視していたという特徴とよく符合する結果である。

図表 4-11 「自分には自分らしさがあると思う」への態度

	度数	パーセント
かなりあてはまる	220	30.9
ある程度あてはまる	355	49.8
あまりあてはまらない	111	15.6
ほとんどあてはまらない	25	3.5
無回答	2	0.3
合計	713	100.0

図表 4-12 「現在の生活に満足している」への態度

	度数	パーセント
かなりあてはまる	81	11.4
ある程度あてはまる	313	43.9
あまりあてはまらない	212	29.7
ほとんどあてはまらない	104	14.6
無回答	3	0.4
合計	713	100.0

図表 4-11 は「自分には自分らしさがあると思う」への態度をみたものである。「ある程度あてはまる」が最も多い。これに「かなりあてはまる」を加えると 80.7%となる。これが生活意識の分析で取り上げた 6 項目中で最も支持されたものである。「自分らしさがある」と多くの者が感じている。

図表 4-12 は「現在の生活に満足している」への態度である。「ある程度あてはまる」が最も多い(43.9%)。しかし次に多いのは、「あまりあてはまらない」(29.7%)である。前者の方に傾くが判断は分かれているようだ。

全体としてみると悩みの分析でみたような、悩みの深さとは「違った」、あるいは悩みの深さに「めげない」生活意識をもっているとも言える。それは、「努力しだいで将来は切り開けると思う」であり、「仕事以外に生きがいがある」であり、そして「自分には自分らしさがあると思う」である。

この対比を理解可能にするために、まず悩みとの関係を検討してみる。その後で、バラバラに検討した生活意識を、全体としてどのような意味の布置となっているのかを明らかにしよう。

(2) 四つの「悩み」と生活意識

さらに、前項で分析した四つの「悩み」とこれらの生活意識はどのような関係にあるのかをみる。クロス集計を行った。カイ二乗検定で統計的に有意なものだけ、図表を掲げた。

第一に取り上げるのは、「今の仕事や働き方の悩み」である。この「悩み」の有無と生活意識の関連を検討した。手法はオーソドックスなクロス集計である。セルごとの調整済み残差の検討も行なった。クロス集計の配置は、「悩み」側を表側とし、生活意識を表頭に配置した。

「今の仕事や働き方の悩み」の有無と「将来の見通しは明るい」との関係をクロス集計した。それが図表 4-13 である。

図表 4-13 「今の仕事や働き方の悩み」 × 「将来の見通しは明るい」のクロス表

		「将来の見通しは明るい」					合計	
		かなりあてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない	無回答		
「今の仕事や働き方の悩み」	悩みあり	度数	20	160	207	101	1	489
		構成比(%)	4.1	32.7	42.3	20.7	0.2	100.0
		調整済み残差	-4.69	-3.63	3.16	4.03	-1.32	
	悩みなし	度数	31	104	66	18	1	220
		構成比(%)	14.1	47.3	30.0	8.2	0.5	100.0
		調整済み残差	4.80	3.73	-3.09	-4.12	0.09	
	無回答	度数	0	1	1	1	1	4
		構成比(%)	0.0	25.0	25.0	25.0	25.0	100.0
		調整済み残差	-0.56	-0.50	-0.55	0.44	7.62	
合計		度数	51	265	274	120	3	713
		構成比(%)	7.2	37.2	38.4	16.8	0.4	100.0

($\chi^2=108.67$, $df=8$, $p<0.000$)

大雑把な傾向としては、「今の生き方や働き方の悩み」が有の場合は「将来の見通しは明るい」とは思わない、無の場合は「将来の見通しは明るい」と思っている、ということである。この現在の仕事や働き方は「未来」を大きく規定している。しかし次の図表 4-14 によると、やはり時間的には共時的である「将来の生き方や働き方の悩み」の方が「将来の見通しは明るい」と強く関係している。

「将来の生き方や働き方の悩み」と「将来の見通しは明るい」をクロス集計した。それが次の図表4-14である。

図表4-14 「将来の生き方や働き方の悩み」×「将来の見通しは明るい」のクロス表

			「将来の見通しは明るい」				合計	
			かなりあてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない		無回答
「将来の生き方や働き方の悩み」	悩みあり	度数	20	180	223	108	2	533
		構成比(%)	3.8	33.8	41.8	20.3	0.4	100.0
		調整済み残差	-6.06	-3.23	3.22	4.22	-0.32	
	悩みなし	度数	31	84	50	11	0	176
		構成比(%)	17.6	47.7	28.4	6.3	0.0	100.0
		調整済み残差	6.21	3.34	-3.15	-4.32	-0.99	
	無回答	度数	0	1	1	1	1	4
		構成比(%)	0.0	25.0	25.0	25.0	25.0	100.0
		調整済み残差	-0.56	-0.50	-0.55	0.44	7.62	
合計		度数	51	265	274	120	3	713
		構成比(%)	7.2	37.2	38.4	16.8	0.4	100.0

($\chi^2=123.12$, $df=8$, $p<0.000$)

この傾向は図表から明らかに見て取れる。図表4-13の「今の仕事や働き方の悩み」よりも強い関係である。この「将来の見通し」と「将来の生き方や働き方の悩み」の共時的なつながりは、現在の生活にも根拠をもつけれども、「このままでは行き詰まってしまう」というような感情を伴う「未来への不安」であるだろう。

図表は省略したが、「人間関係の悩み」や「お金の悩み」も有であると、「将来の見通しは明るい」は否定的なものとなった。

分析手法の性格上、因果関係はわからないが、「悩み」と「将来の見通し」は強く関係していることが確認できる。

第二に生活意識として、「努力への信頼」を取り上げる。これは「悩み」と関係しているのだろうか。それをみたのが図表4-15である。

図表 4-15 「今の仕事の働き方の悩み」×「努力しだいで将来は切り開けると思う」
のクロス表

		「努力しだいで将来は切り開けると思う」					合計	
		かなりあてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない	無回答		
「今の仕事や働き方の悩み」	悩みあり	度数	144	238	82	23	2	489
		構成比(%)	29.4	48.7	16.8	4.7	0.4	100.0
		調整済み残差	-2.95	1.00	2.11	0.69	-0.07	
	悩みなし	度数	91	97	24	7	1	220
		構成比(%)	41.4	44.1	10.9	3.2	0.5	100.0
		調整済み残差	3.19	-1.18	-1.98	-1.02	0.09	
	無回答	度数	0	3	0	1	0	4
		構成比(%)	0.0	75.0	0.0	25.0	0.0	100.0
		調整済み残差	-1.41	1.11	-0.84	2.03	-0.13	
合計		度数	235	338	106	31	3	713
		構成比(%)	33.0	47.4	14.9	4.3	0.4	100.0

($\chi^2=18.06$, $df=8$, $p<0.021$)

前述したように、「努力への信頼」を8割超の者が支持していた。

まず、「今の仕事や働き方の悩み」との関係を見てみよう。「悩みあり」だと、「あまりあてはまらない」が多くなり、「悩みなし」だと「かなりあてはまる」が多い。しかし統計的には「努力しだいで将来は切り開けると思う」は有意であるが、その確率は低い。

そしてそれ以外の「悩み」との統計的に有意な関係はない。すなわち、「努力への信頼」は、「今の仕事や働き方の悩み」がある場合にのみ、すなわち現実の仕事と働き方によって揺るがされている場合にのみ弱まる。それ以外の「将来の生き方や働き方の悩み」や、「人間関係の悩み」、「お金の悩み」で揺らぐことはない。

第三の生活意識として、「仕事以外に生きがいがある」を取り上げる。

「仕事以外に生きがい」という生活意識についても8割に近い者が「有」と答えていた。しかしこの生活意識と「悩み」には、統計的な関係はなかった。クロス集計したセル毎に調整済み残差を取れば一定の特徴はみられるものの、全体的にはこれらの「悩み」とは、「仕事以外の生きがい」は関係しない。すなわち、今の仕事や将来の見通し、人間関係やお金のこととは、仕事以外の「生きがい」の関係はなかった。生きがいは、現在の仕事以外のことで、人間関係やお金を越えたものとしてとらえられていることを表していると思われる。この越えたものについて取り敢えず、「親密な」関係を上げておきたい。これも「人間関係」ではないかと指摘することはできるが、この場合の「人間関係」は他人との間のものとして、イメージしている可能性がある。

第四の生活意識として、「特定の人深くつきあうより広く浅くつきあう方がいい」という生活意識を取り上げる。人間関係に関する意識をこのような形で質問項目としたのは、今日の若者の意識のなかで特徴的だととらえられている「多元的自己」³と、そのもとでの選択的な

人間関係を意識してのことである。

人間関係の戦略に関係する「特定の人と深くつきあうより広く浅くつきあう方がいい」(以下、「広く浅く付き合う」と省略する)と「悩み」の関係は非常に興味深い結果となっている。これは四つの「悩み」全般と深く関わっているのであるが、特に強く関わるのが「将来の生き方や働き方の悩み」についてである。それを表したのが図表4-16である。

前述したように全体的には、「広く浅く付き合う」は支持されていない。図表4-10でみたように、否定が肯定の2倍はあった。

図表4-16 「将来の生き方や働き方の悩み」×「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」のクロス表

		「特定の人と深くつきあうより広く浅くつきあう方がいい」					合計		
		かなりあてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない	無回答			
「将来の生き方や働き方の悩み」	悩みあり	度数	28	113	255	135	2	533	
		構成比(%)	5.3	21.2	47.8	25.3	0.4	100.0	
		調整済み残差	-3.60	-2.85	1.83	2.86	0.82		
	悩みなし	度数	24	57	69	26	0	176	
		構成比(%)	13.6	32.4	39.2	14.8	0.0	100.0	
		調整済み残差	3.73	3.06	-2.04	-2.90	-0.81		
	無回答	度数	0	0	3	1	0	4	
		構成比(%)	0.0	0.0	75.0	25.0	0.0	100.0	
		調整済み残差	-0.56	-1.12	1.17	0.11	-0.11		
	合計		度数	52	170	327	162	2	713
			構成比(%)	7.3	23.8	45.9	22.7	0.3	100.0

($\chi^2=31.02$, $df=8$, $p<0.000$)

しかし図表4-16をみると、「悩み」の有無はつきあい方に大きく関わってくるのがわかる。将来に「悩み」が無であると、「広く浅く付き合う」の支持が増えるのである。逆に「悩み」が有だと、「ほとんどあてはまらない」が増える。支持の比率で見ると、「悩み」が無では、「広く浅く付き合う」の支持が、46.0%と半数近くになる。「悩み」が有では、「広く浅く付き合う」の支持は、26.5%にすぎない。

このことは、「将来の生き方や働き方の悩み」が多かったことを前提にすると、この場合は「狭く深くつきあう」が、「悩み」がなくなると「広く浅くつきあう」ことに切り替えることを意味しているのではないか。すなわち北海道社会においていろいろな困難につきあたり、将来に不安を抱える(いろいろな「悩み」をもっている)からこそ、それに応じた人間関係戦略(「狭く深くつきあう」)が自然に採用されているのではないかという推論ができる。

そして他の「悩み」においても、「悩み」が有では「狭く深くつきあう」がより多く、「悩み」が無では「広く浅くつきあう」がより多い。同様の解釈が可能であろう。この点について

ては、115 頁以降においてソーシャルネットワークとの関係で再検討する。

第五の生活意識として、「自分には自分らしさがあると思う」を取り上げる。これも「悩み」の有無と関係があった。最も強く有意であった「人間関係の悩み」の有無との関係を示す図表 4-17 を上げておきたい。

図表 4-17 「人間関係の悩み」×「自分には自分らしさがあると思う」のクロス表

			「自分には自分らしさがあると思う」					合計
			かなりあてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない	無回答	
「人間関係の悩み」	悩みあり	度数	122	212	75	19	0	428
		構成比(%)	28.5	49.5	17.5	4.4	0.0	100.0
		調整済み残差	-1.67	-0.17	1.76	1.66	-1.74	
	悩みなし	度数	97	143	36	5	2	283
		構成比(%)	34.3	50.5	12.7	1.8	0.7	100.0
		調整済み残差	1.60	0.32	-1.70	-2.05	1.75	
	無回答	度数	1	0	0	1	0	2
		構成比(%)	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	100.0
		調整済み残差	0.59	-1.41	-0.61	3.58	-0.08	
合計	度数	220	355	111	25	2	713	
	構成比(%)	30.9	49.8	15.6	3.5	0.3	100.0	

($\chi^2=24.82$, $df=8$, $p<0.002$)

図表 4-17 では、セルごとの調整済み残差からは極端な結果は示されていない。しかし、「人間関係の悩み」が有では「自分には自分らしさがあると思う」に「あまりあてはまらない」と「ほとんどあてはまらない」を支持する確率が高まり、「悩み」が無では「かなりあてはまる」を支持する確率が高まることわかる。「人間関係の悩み」は「自分らしさ」のイメージに関係している。

「人間関係の悩み」以外では、「今の仕事や働き方の悩み」と関係が深い。「人間関係の悩み」と同様の傾向である。

しかし、「将来の生き方や働き方の悩み」や「お金の悩み」とは関係がなかった。判断は微妙になるが、今現在の悩みと関連して今の「自分らしさ」があるように思う。

ここまで生活意識を悩みとの関係を考察してきた。まとめると図表 4-18 のようになる。

図表 4-18 悩みと生活意識の関係（総括表）

	「将来の見通しは明るい」	「努力したいで将来は切り開けると思う」	「仕事以外に生きがいがある」	「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」	「自分には自分らしさがあると思う」
「今の仕事や働き方の悩み」	◎	△	×	○	○
「将来の生き方や働き方の悩み」	◎	×	×	◎	×
「人間関係の悩み」	◎	△	×	○	○
「お金の悩み」	◎	×	×	△	×

注) ◎は0.1%水準の有意確率、○は1%水準、△は5%水準、×は有意ではない。

悩みと強く関係していた生活意識は、「将来の見通しは明るい」である。そして全く関係がなかったのが「仕事以外に生きがいがある」である。ここまではこれまでの説明で充分であろう。難しいのが残りの三つで、「努力したいで将来は切り開けると思う」と「自分には自分らしさがあると思う」は同質の関係構造をもっていそうだ。それは、現在の悩みとの関係で生活意識が変わるとい性格のものである。これと反対なのが「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」であると思われるが、より注意深くながめると、「将来の生き方や働き方の悩み」と「お金の悩み」への影響のベクトルが反対向きで、一筋縄ではゆかない性格をもっていそうだ。

さらにこの生活意識の布置を明らかにしてゆくがその前に、これらの生活意識同士の関係をシンプルに相関分析にかけてみたい。それが図表 4-19 である。

使用した統計手法は、単純な相関の分析である。ここではピアソンの相関係数を計算した。

図表 4-19 意識の相関係数

		「将来の見通しは明るい」	「努力したいで将来は切り開けると思う」	「仕事以外に生きがいがある」	「特定の人深くつきあうより広く浅くつきあう方がいい」	「自分には自分らしさがあると思う」
「将来の見通しは明るい」	Pearson の相関係数	1	0.36	0.37	0.19	0.36
	有意確率(両側)		4.1E-23	1.1E-24	1.6E-07	7.1E-23
	N		713	713	713	713
「努力したいで将来は切り開けると思う」	Pearson の相関係数		1	0.42	0.09	0.34
	有意確率(両側)			9.3E-32	0.014	6.9E-21
	N			713	713	713
「仕事以外に生きがいがある」	Pearson の相関係数			1	0.06	0.38
	有意確率(両側)				0.084	1.0E-25
	N				713	713
「特定の人深くつきあうより広く浅くつきあう方がいい」	Pearson の相関係数				1	0.14
	有意確率(両側)					2.1E-04
	N					713
「自分には自分らしさがあると思う」	Pearson の相関係数					1
	有意確率(両側)					
	N					

注) 相関の特に強いものはゴシック体で強調した。

「努力次第で将来は切り開けると思う」と「仕事以外に生きがいがある」の結びつきが最も強い。整理しながら説明すると、「将来の見通しは明るい」は、「努力しだいで将来は切り開けると思う」、「仕事以外に生きがいがある」、そして「自分には自分らしさがあると思う」と強い相関がある。基本はこの四つの相関があると考えて良い。

補足も含めて確認すると、「努力しだいで将来は切り開けると思う」と「仕事以外に生きがいがある」（これが最強である）、「自分には自分らしさがあると思う」の強い相関がある。そして「仕事以外に生きがいがある」と「自分には自分らしさがあると思う」の強い相関がある。すなわち、先に整理した四つの生活意識間の関係はどれも強い相関がある。

これらの四つの生活意識を整理してみよう。現在の意識と未来に関わる意識を相対的に区別し配置すると、「将来の見通し」の明るさに現実性を与えるものとして、あるいは将来と現実をつなぐものとして「努力への信頼」がある。そして現在、「仕事以外の生きがい」と「自分らしさ」を感じている。このような整理ができる。

そして、この四つと異質なものとして、「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」がある。

もう少し細かくみる。「将来の見通しは明るい」と「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」には比較的強い相関がみられる。そして「自分には自分らしさがあると思う」、「努力次第で将来は切り開けると思う」の順序で相関が弱くなる。「仕事以外に生きがいがある」とは相関がない。すなわち、この人間関係の戦略ともいえる「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」は、「未来の見通し」に関わるものとしてある。

このことは、二つの点でこれまでの分析に疑問を投げかけるものとなっている。ひとつは率直な疑問であるが、多くのものが「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」に批判的であるという事実との整合性という疑問が出てくる。もうひとつは「将来の生き方や働き方の悩み」を多くの者が抱えていたという事実との整合性である。

どのように考えれば良いのか。ここで一旦、この疑問の追求から離れて、北海道におけるソーシャルネットワークの状況について明らかにしてみたい。

3. ソーシャルネットワークの状況

106 頁において、どのようなネットワークを重視した分析を行なう必要があるのかという点で整理をした。ネットワークの布置を、「肉親」（「親・保護者」と「兄弟姉妹」）、「友人」（「学校で知り合った友人」、「学校外で知り合った友人」そして「モバ友・マイミクなどのネット上の友人」）、「職場」（「職場の上司・先輩・同輩」）、「そして「パートナー」（「恋人・配偶者」）の四つに整理した。

悩みとソーシャルネットワークの関係を調査したので、ここでは悩み毎に、ソーシャルネットワークをどの程度の者が使用しているのかをまとめた。それが図表 4-20~23 である。

ソーシャルネットワークの使用は、先の四つのカテゴリーを構成するそれぞれの相談先のどれかに相談があった場合にそのカテゴリーを使用したとして数えるやり方をとった。そして男性／女性の区別、無配偶／有配偶の区別、現在の就業状況の区別(正社員(含公務員)／その他就業／無業)の区別を行い比較した。

図表への標記は、チャンネル数の分布(%)とチャンネル数が少ない者(0 か 1)の%、それに相談平均チャンネル数(以下では単に「平均チャンネル数」と記述する)とケース数(N)である。男女を対比する形で図表化した。平均チャンネル数を重点とした記述を行なう。ケース数(N)的には無業の数が少ないので、参考程度の意味となっている。

図表 4-20 「現在の自分の仕事や働き方についての悩み」と平均チャンネル数(%)
(無配偶)

チャンネル数	男性・無配偶・正社員(含公務員)	男性・無配偶・その他就業	男性・無配偶・無業
0	13.0	13.8	33.3
1	51.9	40.0	44.4
2	27.3	29.2	22.2
3	6.5	15.4	0.0
4	1.3	1.5	0.0
0~1合計	64.9	53.8	77.8
平均チャンネル数	1.31	1.51	0.89
ケース数(N)	77	65	9

チャンネル数	女性・無配偶・正社員(含公務員)	女性・無配偶・その他就業	女性・無配偶・無業
0	6.5	9.1	0.0
1	38.7	42.0	50.0
2	33.3	21.6	50.0
3	14.0	20.5	0.0
4	7.5	6.8	0.0
0~1合計	45.2	51.1	50.0
平均チャンネル数	1.77	1.74	1.50
ケース数(N)	93	88	6

図表 4-20 は「現在の仕事や働き方の悩み」の平均チャンネルをみたものである。男性の場合、就業別の平均チャンネル数は、「その他就業>正社員(含公務員)>無業」となっている。女性の場合は少し違う。就業別の平均チャンネル数は、「正社員(含公務員)>その他就業>無業」となっている。しかし前二者の差は小さい。平均チャンネル数の少ない者の%も拮抗している。正社員(含公務員)が少し少ない。男性と女性を比較すると、女性の方がかなり多いという特徴がある。

図表 4-2 1 「将来の生き方や働き方についての悩み」と平均チャンネル数(%)
(無配偶)

チャンネル数	男性・無配偶・正社員(含公務員)	男性・無配偶・その他就業	男性・無配偶・無業	チャンネル数	女性・無配偶・正社員(含公務員)	女性・無配偶・その他就業	女性・無配偶・無業
0	20.7	16.9	30.0	0	9.4	13.4	14.3
1	47.6	39.0	50.0	1	43.8	46.4	57.1
2	25.6	35.1	20.0	2	31.3	22.7	14.3
3	4.9	9.1	0.0	3	12.5	11.3	14.3
4	1.2	0.0	0.0	4	3.1	6.2	
0~1合計	68.3	55.8	80.0	0~1合計	53.1	59.8	71.4
平均チャンネル数	1.18	1.36	0.90	平均チャンネル数	1.56	1.51	1.29
ケース数(N)	82	77	10	ケース数(N)	96	97	7

図表 4-2 1 は「将来の生き方や働き方の悩み」の平均チャンネルをみたものである。男性の場合、就業別の平均チャンネル数は、「その他就業>正社員(含公務員)>無業」となっている。女性の場合は少し違う。就業別の平均チャンネル数は、「正社員(含公務員)>その他就業>無業」となっている。正社員(含公務員)とその他就業にはそれほど大きな差がない。男性と女性を比較すると、女性の方がかなり多いという特徴がある。

図表 4-2 2 「人間関係についての悩み」と平均チャンネル数(%) (無配偶)

チャンネル数	男性・無配偶・正社員(含公務員)	男性・無配偶・その他就業	男性・無配偶・無業	チャンネル数	女性・無配偶・正社員(含公務員)	女性・無配偶・その他就業	女性・無配偶・無業
0	17.5	15.0	37.5	0	6.1	6.5	0.0
1	49.2	56.7	62.5	1	43.9	40.3	80.0
2	28.6	26.7	0.0	2	36.6	26.0	0.0
3	4.8	1.7	0.0	3	12.2	19.5	20.0
4	0.0	0.0	0.0	4	1.2	7.8	0.0
0~1合計	66.7	71.7	100.0	0~1合計	50.0	46.8	80.0
平均チャンネル数	1.21	1.15	0.63	平均チャンネル数	1.59	1.82	1.40
ケース数(N)	63	60	8	ケース数(N)	82	77	5

図表 4-2 2 は「人間関係の悩み」の平均チャンネルをみたものである。男性の場合、就業別の平均チャンネル数は、「正社員(含公務員)>その他就業>無業」となっている。正社員(含公務員)とその他就業の差は小さい。女性の場合、就業別の平均チャンネル数は、「その他就業>正社員(含公務員)>無業」となっている。平均チャンネル数は女性の方がかなり多い。

図表 4-23 「お金についての悩み」と平均チャンネル(%) (無配偶)

チャンネル数	男性・無配偶・正社員(含公務員)	男性・無配偶・その他就業	男性・無配偶・無業
0	32.3	20.3	22.2
1	47.7	51.6	55.6
2	20.0	21.9	22.2
3	0.0	6.3	0.0
4	0.0	0.0	0.0
0~1合計	80.0	71.9	77.8
平均チャンネル数	0.88	1.14	1.00
ケース数(N)	65	64	9

チャンネル数	女性・無配偶・正社員(含公務員)	女性・無配偶・その他就業	女性・無配偶・無業
0	17.1	21.4	33.3
1	42.1	54.8	50.0
2	32.9	16.7	16.7
3	7.9	4.8	0.0
4	0.0	2.4	0.0
0~1合計	59.2	76.2	83.3
平均チャンネル数	1.32	1.12	0.83
ケース数(N)	76	84	6

図表 4-23 は「お金についての悩み」の平均チャンネルをみたものである。男性の場合、就業別の平均チャンネル数は、「その他就業>無業>正社員(含公務員)」となっている。このパターンは今までなかったものである。正社員(含公務員)の場合、お金については「相談相手がない」というより、「相談しにくい」あるいは「する必要がない」のではないだろうか。女性の場合、就業別の平均チャンネル数は、「正社員(含公務員)>その他就業>無業」となっている。これはお金の相談についてのネットワーク数を直に反映していると考えられる。その意味でも、前述したような男性正社員におけるお金の悩みの「相談しにくさ」は、「体面」との関わりも想定できそうだ。

すなわち、ケース数(N)の少ない失業・無業をはずして考えたときの、男性の平均チャンネル数は、「人間関係の悩み」以外では「その他就業>正社員(含公務員)」となっている。女性の場合は全てで、「正社員(含公務員)>その他就業」となっている。男性・無配偶の場合には、その他就業という就業状況の方が、相談チャンネル数が多いというおもしろい結果となった。

この解釈を次のように考えた。男性の場合においては正社員になると相談のチャンネルを職場に収斂する、あるいはせざるを得ないので減る。その他就業は職場の拘束力が少ないのでもとからあった相談のチャンネルを少なくすることはない。女性の場合においては、正社員(含公務員)になっても、もともともっていた相談のチャンネル数減らすことなく職場の関係が広がってゆく。この広がりが生活中心に仕事をしているその他就業の場合にはあまり広がらない。そのために正社員(含公務員)の方が相談のチャンネルが多い。

有配偶の場合も同様の図表を作成したが、煩雑になるので省略し、ネットワーク数のみを整理した図表を掲げることにしたい。それが図表 4-24 である。

図表 4-24 就業別・「悩み」別の平均チャンネル数（有配偶）

	男性			女性		
	正社員 (含公務員)	その他就 業	無業	正社員 (含公務員)	その他就 業	無業
「現在の仕事や働き方についての悩み」	1.45	1.11	0.67	1.41	1.70	1.33
「将来の生き方や働き方についての悩み」	1.32	1.15	1.33	1.14	1.69	2.25
「人間関係についての悩み」	1.23	1.06	1.33	1.35	1.62	2.00
「お金についての悩み」	1.21	1.05	1.67	1.05	1.28	1.25

男性の場合、無業はケース数(N)が少ないのでバラツキが大きくなっている。これを無視して考えれば、平均チャンネル数は「正社員(含公務員)＞その他就業」となっている。女性の場合に同様に考えれば、「その他就業＞正社員(含公務員)」となる。男性は、無配偶の場合とは逆になっている。これには有配偶による生活の安定が関わっているのではないか。女性の場合には全く逆で、有配偶に伴う相談のチャンネルがその他就業の方が仕事の拘束力が少ないだけに増えることとなっている。

無配偶と有配偶の差はどうなっているのだろうか。単純な比較となるが図表 4-24 と同じ形式をとって有配偶の平均チャンネル数から無配偶の平均チャンネル数を引いたものを作ってみた。それが図表 4-25 である。

図表 4-25 就業別・「悩み」別の平均チャンネル数の変化（有配偶－無配偶）

	男性			女性		
	正社員 (含公務員)	その他就 業	無業	正社員 (含公務員)	その他就 業	無業
「現在の仕事や働き方についての悩み」	0.14	-0.40	-0.22	-0.36	-0.04	-0.17
「将来の生き方や働き方についての悩み」	0.13	-0.21	0.43	-0.42	0.19	0.96
「人間関係についての悩み」	0.02	-0.09	0.71	-0.23	-0.20	0.60
「お金についての悩み」	0.33	-0.09	0.67	-0.27	0.16	0.42

男性の場合と女性の場合で有配偶の意味が違っているようだ。

男性で正社員の場合は、結婚によって平均チャンネル数が増えている。これはどの悩みでも同じだ。「お金に関する悩み」の相談でもっとも顕著に増えている。「人間関係の悩み」の相談はプラスになるとは言ってもほんの少しである。逆に、男性でその他就業の場合は、有配偶によって平均チャンネル数は減っている。これもどの悩みでも同じだ。特に、「現在の仕事や働き方の悩み」で減っている。雇用が不安定な時の結婚は、あるいは結婚して雇用が不安定になると、平均チャンネル数が減る。相談の範囲が狭まる。「現在の仕事や働き方の悩み」を相談する場としての、職場の位置が下がる。

女性で正社員(含公務員)の場合は、有配偶によって平均チャンネル数が減っている。男性の有配偶・正社員(含公務員)と全く逆の結果となった。著しい減少と言って良い。特に、「将

来の生き方や働き方の悩み」の平均チャンネル数の減少は大きい。女性でその他就業の場合には、悩みの種類によって平均チャンネル数の増減が異なる結果となっている。減少するのは、「現在の仕事や働き方の悩み」と「人間関係の悩み」である。ただし前者の変化は少ない。逆に増加するのは、「将来の生き方や働き方の悩み」と「お金の悩み」である。

単純な比較でしかないが、相談の平均チャンネル数に対する、無配偶／有配偶と就業状況の違いは、男性と女性におよそ真逆の違いをもたらしている。北海道における「親密な」関係重視という特徴を指摘してきたが、配偶者をもつことが相談のチャンネルにもたらす大きな影響、特に性別によって影響のベクトルが反対であることは重要な示唆を含んでいるだろう。

ここでの平均チャンネル数の変化を元の細かい関係に戻して、就業状況別に最も大きく変化していた悩みを対象にして、詳しく変化をみたのが**図表 4-26**である。

図表 4-26 就業状況別悩み別の相談割合の変化（有配偶－無配偶）（％）

	男性		女性	
	正社員(含公務員)	その他就業	正社員(含公務員)	その他就業
	「お金の悩み」	「現在の仕事や働き方の悩み」	「将来の生き方や働き方の悩み」	
親・保護者	-20.6	-30.4	-14.3	-16.5
兄弟姉妹	-4.5	-11.4	-11.9	-3.0
学校で知り合った友人	-11.9	-37.5	-51.0	-21.2
学校外で知り合った友人	3.4	-14.1	-28.6	5.1
学校の先生・職員・相談員	0.0	-4.6	-1.0	-1.0
職場の上司・先輩・同僚	8.4	-20.9	-0.1	-5.3
恋人・配偶者	54.2	46.3	25.4	51.6
公的な支援機関や労働組合・専門家等	0.0	-3.1	0.0	-1.0
モバ友・マイミクなどのネット上の友人	0.0	-6.2	-1.0	1.6
その他	-4.4	-0.6	5.4	0.0
小計	24.5	-82.4	-77.2	10.3
誰にも相談していない	-11.7	3.4	0.1	-7.9

図表 4-25では平均チャンネル数の変化であったが、この**図表 4-26**では関係別にみることができる。

男性の正社員(含公務員)の場合は、有配偶によって「恋人」から「配偶者」になることで相談率が圧倒的に高まる。「職場の上司・先輩・同僚」も少し高まる。それが「親・保護者」と「学校で知り合った友人」の低下を上回るのである。そして「誰にも相談しない」が減った。

男性のその他就業の場合も、有配偶によって「恋人」から「配偶者」になること相談率は確かに高まる。しかし、「学校で知り合った友人」、「親・保護者」、「職場の上司・先輩・同僚」と軒並み相談率を下げる。結局、家庭に埋没するという結果に陥る。そして「誰にも相談し

ない」が増える。

女性の正社員(含公務員)の場合は、有配偶によってもそれほど相談率は増えない。その代わり、「学校で知り合った友人」(この変化は著しい)、「学校外で知り合った友人」、「親・保護者」等が減る。正社員(含公務員)であるにもかかわらず、「職場の上司・先輩・同僚」の相談率がほんのわずかだが減ってしまっている。有配偶によって孤立している形となっている。正社員(含公務員)であることが、職場の相談を容易にすることはない。ほんのわずかだが「誰にも相談しない」が増える。

女性のその他就業の場合は、有配偶によって「恋人」から「配偶者」になることで相談率は高まる。これが、「学校で知り合った友人」や「親・保護者」を補う。そして「学校外で知り合った友人」が若干だが増えているのは見逃せない。言わば、「職場に多くをとられないで、多方面の関係を維持できている」のである。「誰にも相談しない」が減る。

有配偶による悩みの相談の範囲は、男性か女性かで、確かに全くその影響が異なっている。

ところで、ソーシャルネットワークと調査対象者の属性との関係についての分析は、ここまでにして生活意識とソーシャルネットワークの関係にもどって、この事例(北海道の場合)の矛盾、「将来の生き方や働き方の悩み」の多さと、「努力への信頼」を核とした「明るい将来への見通し」の関係について、特に生活意識に異質な生活意識であった人間関係戦略(「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」)の意味について掘り下げてみよう。

4. グループ別の生活意識の特徴

生活価値の分析において、「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」(以下では単に「広く浅くつきあう方がいい」と省略する)は特徴的な位置を占めていた。特に、悩みの焦点である「将来の生き方や働き方の悩み」と強い関係をもっていた。これと、ソーシャルネットワークのネットワーク数との関係を検討してみよう。「広く浅くつきあう方がいい」の4点尺度ごとに、「人間関係の悩み」相談のチャンネル数がどのように分布しているのかを算出した。それが**図表4-27**である。

図表 4-27 「広く浅くつきあう方がいい」×「人間関係の悩み」相談のチャンネル数

		「人間関係の悩み」相談のチャンネル数					合計	
		0	1	2	3	4		
「 広く 浅く つき あう 方が いい 」	かなりあて はまる	度数	37	12	3	0	0	52
		構成比(%)	71.2	23.1	5.8	0.0	0.0	100.0
		調整済み残差	3.61	-0.89	-2.26	-1.90	-0.85	
	ある程度あ てはまる	度数	92	50	23	4	1	170
		構成比(%)	54.1	29.4	13.5	2.4	0.6	100.0
		調整済み残差	2.10	0.33	-1.44	-2.32	-0.91	
	あまりあて はまらない	度数	138	91	65	29	3	326
		構成比(%)	42.3	27.9	19.9	8.9	0.9	100.0
		調整済み残差	-2.35	-0.27	1.81	2.93	-0.76	
	ほとんどあ てはまらない	度数	67	48	31	10	5	161
		構成比(%)	41.6	29.8	19.3	6.2	3.1	100.0
		調整済み残差	-1.59	0.45	0.80	0.10	2.37	
	無回答	度数	1	1	0	0	0	2
		構成比(%)	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	100.0
		調整済み残差	0.08	0.68	-0.64	-0.36	-0.16	
	合計	度数	335	202	122	43	9	711
		構成比(%)	47.1	28.4	17.2	6.0	1.3	100.0

($\chi^2=36.67$, $df=16$, $p<0.002$)

図表 4-27 のカイ二乗検定からは、「広く浅くつきあう方がいい」とチャンネル数は関わっていることがわかる。調整済み残差をみてもこの影響は顕著である。

そしてこの「広く浅くつきあう方がいい」は、「現在の仕事や働き方の悩み」がない場合や「将来の生き方や働き方の悩み」がない場合に、強く支持されていたことを思い出す必要がある(図表 4-16 参照)。

ソーシャルネットワークは、「悩み」の相談ネットワークである。自分がうまくいっている時には、「広く浅くつきあう方がいい」と思っているから、相談はしない。「悩む」ことによってソーシャルネットワークが呼び出される関係となっている。あるいは北海道において悩みが多かったことを考慮するなら、特定の状況にある場合にだけ「広く浅くつきあう方がいい」という在り方をとることができる、ということであろう。

この要因によって、安定した職場が、あるいは職場の安定が広いソーシャルネットワークをもっているとは限らないという逆説につながる。

ここまでみてきた生活意識は、男/女の区別、有配偶/無配偶の区別、そして就業状況の区別によって違っていた。全体的に高かった「将来の生き方や働き方の悩み」はこの区別とどのように関わっているのだろうか、そして検討した五つの生活意識のうち、全体的に強固に結びついていた四つの意識(「将来の見通しは明るい」、「努力しだいで将来は切り開けると思う」、「仕事以外に生きがいがある」、「自分には自分らしさがあると思う」)とひとつだけ異質であった「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」とは、どのように組み合わせられて全体としての生活意識を形作っているのでしょうか。

これらのことを調べるために、まず先の三つの区別から作られる八つのグループ毎に、「将来の生き方や働き方の悩み」をもっているものの割合を明らかにする。そしてこの八つのグループの悩みの重さを踏まえつつ、「広く浅くつきあう方がいい」と他の四つの生活意識との関係を検討する。

(1) 「将来の生き方や働き方の悩み」のグループによる違い

まず八つのグループ毎に「将来の生き方や働き方の悩み」がある者のパーセンテージを計算した。それが図表4-28である。

図表4-28 グループ別の「将来の生き方や働き方の悩み」がある (%)

		正社員(含公務員)	その他就業
男性	無配偶	68.9	75.5
	有配偶	63.8	80.0
女性	無配偶	83.5	81.5
	有配偶	75.0	72.4

最も悩みが大きい方から順に上げてみよう。女性・無配偶・正社員(含公務員) > 女性・無配偶・その他就業 > 男性・有配偶・その他就業 > 男性・無配偶・その他就業 > 女性・有配偶・正社員(含公務員) > 女性・有配偶・その他就業 > 男性・無配偶・正社員(含公務員) > 男性・有配偶・正社員(含公務員)の順となる。

性別に整理すると、男性は就業状況が「将来の生き方や働き方の悩み」に大きく影響していると言える。女性は有配偶かどうか「将来の生き方や働き方の悩み」に大きく影響している。悩みの平均チャンネル数の違いと同様の差異が認められる。

それでは分析の最後になるが、この階層ごとの生活意識を、「広く浅くつきあう方がいい」という人間関係戦略に絞り込んで、他の四つの生活意識との関係を、相関係数を用いて検討する。

(2) グループごとの生活意識の差異—「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」をめぐって

まず前提となるのは、生活意識の相関分析を行なった図表4-19において既述したように、「将来の見通しは明るい」、「努力しだいで将来は切り開けると思う」、「仕事以外に生きがいがある」、「自分には自分らしさがあると思う」という四つの生活意識は強固に結びついてきたということである。それらと「特定の人と深く付き合うより広く浅くつきあう方がいい」との相関は部分的であった。

これをグループ別に、人間関係戦略(「広く浅くつきあう方がいい」と他の四つの生活意識との相関をみた。それが図表4-29である。

図表4-29 性別・配偶者別・就業状況別の人間関係戦略（広く浅くつきあう）と他の生活意識

			「将来の見通しは明るい」	「努力しだいで将来は切り開けると思う」	「仕事以外に生きがいがある」	「自分には自分らしさがあると思う」	
男性	有配偶	正社員(含公務員)	Pearsonの相関係数	0.19	0.16	-0.11	0.17
			有意確率	0.066	0.135	0.300	0.098
			N	94	94	94	94
	その他就業		Pearsonの相関係数	0.12	-0.11	0.00	-0.07
			有意確率	0.561	0.611	0.990	0.724
			N	25	25	25	25
	無配偶	正社員(含公務員)	Pearsonの相関係数	0.11	-0.03	-0.17	-0.18
			有意確率	0.234	0.714	0.060	0.048
		N	119	119	119	119	
その他就業		Pearsonの相関係数	0.01	-0.09	-0.07	0.06	
		有意確率	0.914	0.388	0.515	0.540	
		N	102	102	102	102	
女性	有配偶	正社員(含公務員)	Pearsonの相関係数	0.01	0.06	-0.06	0.20
			有意確率	0.947	0.778	0.745	0.300
			N	28	28	28	28
	その他就業		Pearsonの相関係数	0.40	0.19	0.05	0.24
			有意確率	0.000	0.092	0.691	0.039
			N	76	76	76	76
	無配偶	正社員(含公務員)	Pearsonの相関係数	0.40	0.45	0.41	0.51
			有意確率	0.000	0.000	0.000	0.000
		N	117	117	117	117	
その他就業		Pearsonの相関係数	0.07	0.01	0.01	-0.09	
		有意確率	0.446	0.892	0.919	0.346	
		N	121	121	121	121	

注)有意確率が0.1%水準は文字を大きくゴシックにした。1%水準はゴシックにした。

男性の場合に、人間関係戦略(「広く浅くつきあう方がいい」)が相関するのは、無配偶で正社員(含公務員)の場合の、「自分には自分らしさがあると思う」についてだけである。そしてこれは負の相関である。この人間関係戦略をとると「自分には自分らしさがあると思う」が弱くなってしまう。正社員(含公務員)の層が無配偶の場合に職場に狭く深くつきあっている状況がわかる。だから「将来の生き方や働き方の悩み」も少ない。

女性の場合は、多くの項目が正の相関をしている。まず有配偶でその他就業の時には、この人間関係戦略は、「将来の見通しは明るい」と「自分には自分らしさがあると思う」に結びついている。家庭を中心とした生活を送りながら、うまく人間関係をコントロールする。それができて「将来の見通し」が明るく、「自分らしさ」が感じられる。他方、無配偶で正社員(含公務員)の場合は、全体と同じ傾向が強く表れているといえよう。人間関係戦略は、「将来の見通し」、「努力への信頼」、「仕事以外の生きがい」そして「自分らしさ」、これらを獲得することと強く結びついている。

この人間関係戦略と悩みの関係を整理してみよう。

「将来の生き方や働き方の悩み」が多かった女性・無配偶・正社員（含公務員）の階層は、明るく生きる（「将来の見通し」、「努力への信頼」、「仕事以外の生きがい」、「自分らしさ」を得る）ために、この人間関係戦略をとっていた。これはこのグループの社会関係の多さをマネジメントするためでもある。

「将来の生き方や働き方の悩み」が少なかった女性・有配偶・その他就業のグループは、生活の確かさと関わる形で（「将来の見通しは明るい」と「自分には自分らしさがあると思う」）、この人間関係戦略をとっていた。

「将来の生き方や働き方の悩み」が最も少ないもののひとつである男性・無配偶・正社員（含公務員）の場合は、この生活に溶け込んでゆくために狭く深くつきあい、そこで「自分らしさ」をつかむ。比較的少ない相談平均チャンネル数と対応している。

5. まとめ

始めに全体的な特徴を述べた。特に強調したのは、「将来の生き方や働き方の悩み」が多かったことである。そして「悩み」の性格に応じた「親密な」関係を重視していた。「職場の上司・先輩・同輩」への広がりもあまりなく、当然のように「公的なもの」への広がりを欠き、特に、最も選択の多い悩みである「将来の生き方や働き方の悩み」を相談する「恋人・配偶者」の存在が重要であった。

しかし、全体としてみると悩みの分析でみたような、悩みの深さとは「違った」、あるいは悩みの深さに「めげない」生活意識をもっていた。それは、「努力しだいで将来は切り開けると思う」であり、「仕事以外に生きがいがある」であり、そして「自分には自分らしさがあると思う」である。そして「将来の見通しは明るい」とも思っていた。

悩みと強く関係していた生活意識は、「将来の見通しは明るい」である。当然、悩みが大きいと「将来の見通し」は暗くなる。そして全く関係がなかったのが「仕事以外に生きがいがある」である。

ソーシャルネットワークは具体的な性別・配偶別・就業状況別で異なっていた。注意すべきは配偶別と就業状況別でそれぞれ効果が異なっていた点である。

簡潔に述べると、相談のチャンネル数に対する、無配偶／有配偶と就業状況の違いは、男性と女性におよそ真逆の違いをもたらしている。

就業状況の違いは男性と女性において、全く異なる効果をもっていた。無配偶の場合、男性の相談チャンネル数は、正社員（含公務員）よりもその他就業の方が多い。女性の場合は、正社員（含公務員）がその他就業より多い。一般的には正社員（含公務員）の方が相談のチャンネルが多いように思われるが、それは女性にあてはまり、男性にはあてはまらない。

そして無配偶／有配偶の違いも男性と女性において、全く異なる効果をもっていた。男性で正社員の場合は、有配偶によって平均チャンネル数が増える。しかしその他就業の場合は、有配偶によって平均チャンネル数は減っている。無配偶の場合と逆になっている。他方、女

性で正社員(含公務員)の場合は、有配偶によって相談チャンネル数が著しく減少する。男性の有配偶・正社員(含公務員)と全く逆の結果となった。女性でその他就業の場合には、悩みの種類によって相談チャンネル数の増減が異なる結果となっている。

北海道における「親密な」関係重視という特徴を指摘してきたが、配偶者をもつことが相談のチャンネルにもたらす大きな影響、特に性別によって影響のベクトルが反対であることは重要な示唆を含んでいるだろう。

そして人間関係戦略の採用の仕方も、具体的な性・配偶の有無・就業状況の違いに大きく影響されている。また同様にその意味も異なっていた。

特に、無配偶で正社員(含公務員)の男性の場合に「自分らしさ」をもつことと「狭く深くつきあう」人間関係戦略が関係していたこと、無配偶で正社員(含公務員)の女性の場合は逆に、「浅く広くつきあう」人間関係戦略がポジティブな生活意識と強く関係していたことがわかった。すなわち、企業への所属の意味が全く異なっていた。そして有配偶でその他就業の女性の場合にも、「広く浅くつきあう」人間関係戦略が「将来の見通し」や「自分らしさ」に関係しており、男性と比較して人間関係をうまくやってゆくことが重視されている。

¹ ここで用いた「調整済み残差」は、それぞれのセルの平均からのズレを記述するものである。標準偏差で2(正確には1.96)を超えたものは、5%水準で有意の差があることを表す。

² 例えば「肉親」であれば、「親・保護者」か「兄弟姉妹」のどちらかに相談する場合は「肉親」有としてカウントする。

³ 浅野智彦『検証・若者の変貌』、勁草書房、2006年